手をつなぐとも
等友
S60・10・1生

〒111-0041
台東区元浅草
2－10－17
3841－2844
浄土真宗
勝龍山
等覚寺
住職
朝倉馨

平成25年1月
第98号

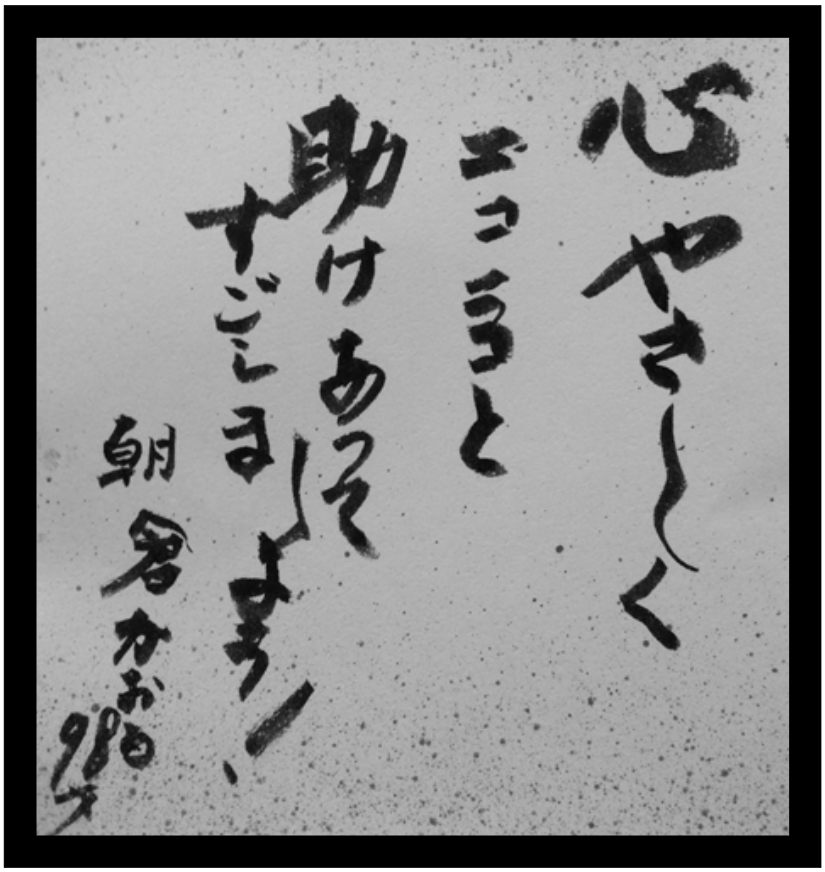
東本願寺 報恩講
（本山ホームページより）

今、在る自分の人生を美しく愛しみ続けたい

今、在る自分自身に満足すると、生きるということが実に愛するべきものであるとわかってくる。春風の中の生命力、秋風が運んでくる草木の清々しい香りに暮らしの悩み事すら忘れさせてくれる喜びを感じる。いかに自分自身の人生を愉しく生きるかというのは、今、在る自分を取り巻く苦悩や障害の問題ではなく、自分自身の生命を慈しんでいるかどうか。人を愛するには、勇気がいる。心から愉しく自分自身を愛しみ生きたいと願うことが、自分自身の不定なる人生への信頼をうむ。

真宗大谷派 青少幼年センターホームページ
「出遇った言葉」より

住職から一言



実は住職は年末から年明けまで肺炎で入院していたのですが、その入院中に看護士の方々から頼まれて一筆したためたのが上記のものになります。入院中は若い看護士の方々に元気をもらい、みるみる回復していったので、感謝の気持ちも入っていたようです。

現在は後述の新年会にもお参りし、４月の誕生日で九十九歳となるため、次の百歳を目指して家族共々助け合って過ごしている毎日です。（翔）

各行事のご報告

等覚寺にて行われました行事のご報告を日付が新しい順にさせていただきます。

◎新年会

平成二十五年一月二十日に新年会を開催いたしました。

年が明けて大雪に見舞われた次の週末だったので、境内にはまだ雪が残る中大勢の方に参加いただき、新たな年を迎えられた慶びを胸に、新年の法要も皆様と共に無事お勤めすることができました。新年会は例年、他の行事とは違ってくじ引きやじゃんけん大会等、楽しい催しもありますのでみなさんの表情もなごやか。楽しんでいただけたんじゃないかと思います。

少しではありますが、写真と共にご紹介させていただきます。今回来られなかったみなさまも次回はぜひお気軽にご参加下さい。

白熱のじゃんけん大会！

みなさん真剣な表情

長村さん宮原さん
商品の提供ありがとうございます！

会食では一変 なごやかに

当日のお勤め後の法話もご紹介させていただきます。

・浄土真宗って？

新年ということもありますので、ここで今一度浄土真宗の教えと言いますか、そういったことに立ち返ってお話をさせていただこうと思うんです。そもそも浄土真宗とは親鸞聖人という方が開かれました。いまから七百五十年前に亡くなられた方ですから、鎌倉時代ですね。親鸞聖人は九歳で得度され二十九歳まで比叡山延暦寺におりました。当時の比叡山は今でいう東大のような最高学府です。全国から優秀な僧侶たちが勉強のために登っている、そこで二十年間勉強をされたんですが、ここには私自身が救われる道はないと、非常に苦悩されながら二十九歳の時に下山しました。その後、出会ったのが法然上人の浄土の教えだったんです。法然上人自身も比叡山で先に学ばれていたんですが、法然は大天才で後々は比叡山のトップに立つであろうといわれていました。その法然ですら救われる道はないということで、先に下りられていたわけです。その法然がひろめていたのが浄土教という教えです。中国から伝わってきていた浄土教。これは何かといいますと、他の宗派の教えは自力の教えです。自分が修行し功徳を積むことによって悟りを開く。浄土宗や浄土真宗の浄土教という教えは、修行することなく、私たち誰でもが平等に救われるんです。というのは、お釈迦さま自身がそもそも二千五百年も前に苦行をなされて悟りを開いた理由というのが、私たち人間は結局煩悩を捨てきれない存在なんだと、どんなに苦行や修行をしても煩悩というのは生きているうちは離れていかないんだと、そして煩悩があるからこそ、私たち

は苦しむんだということ。その老いる苦しみや、病に倒れる苦しみそして死にゆく苦しみ、その生老病死の四つの苦しみを、切り捨てるんではなく避けるんではなくて、どうしっかりと受け止めて歩んでいくかという教えを開かれたのがお釈迦さまであって、一部の僧侶や偉いお坊さんだけが修行をして救われていくというのがお釈迦さまが説いた教えではないんですね。そこで親鸞聖人は浄土教こそが私たちが救われる道だということで、法然上人の元、一生涯かけて勉強し、広められたのが今日の浄土真宗なんです。

・南無阿弥陀仏

そこで出てくるのが、南無阿弥陀仏という念仏なんですね。南無というのは、ナマステというインドのあいさつで、阿弥陀如来にお任せします、すべてお任せして生きていきますというのが南無阿弥陀仏というお言葉なんですが、実は僕自身もなまんだぶつと口に出すのが、わざとらしく言っているようで気恥ずかしかったんです。いつの日か自然に手を合わせると同時になまんだぶつと口から出るようになりました。これは習慣化ということもあるかと思います。ですがそれとは別に、私自身が年を重ねるにつれて、自分自身一人では生きていけないんだということ、わが身わが想いでさえ自分の思い通りにならないんだということを、まだ未熟者でありながらもいろんな機会で知ることが多くなりまして、それにつれていろんな方々、ご縁によって私自身が

成り立っていることに対する、自然と感謝せずにおれない気持ちから私自身は自然となまんだぶつと声に出るようになったのかなというふうに、気付かせていただくようになりました。

・浄土真宗のご利益？

じゃあ他の宗派と違って、浄土真宗の本当の救いというのは、ご利益というのはなんなんだということですね。

平野恵子さんという方は生まれた時から先天的な障害を持たれた娘さんをお持ちのお母さんなんですが、目を動かす以外は一切体を動かせないお子さんをお持ちになって非常に苦労をされていらっしゃいました。そんなある時に真宗のお坊さんが、人間というのは問いを持たなければいけない、問いがあるところに初めて道は開けていくんだというお話をしたそうです。そのお話を聞いて平野さんは娘を連れてお坊さんに、あなたは残酷なことを言いました。この娘はしゃべれないし、今後もずっと意思を伝えることもできない。そんな娘にとって問いを持つことはできない、だから娘は救われないんじゃないかと、そういうことをおっしゃられたそうなんですね。そしたらそのお坊さんが、それはあなた自身がそう思われているだけで本当にそうでしょうか。私には、その娘さんがご自身の体をもって精一杯私たちに問いを投げかけてくれているように思います。本当に生きるということはどういうことか、いのちというのはどういうことか、私たちに投げかけてくれているんじゃないですかと、おっしゃられたそうです。そのときに、平野さんもはっと

させられたそうで、本当に考えが、天地が逆転したような気がしたと。今まで自分のまなこが曇っていたんだと気付かされたと。

それ以降平野さんは真宗の教えのもとに生きて行かれたんですが、残念ながら四十一歳の若さでがんを患われて亡くなられてしまいました。その亡くなる時に子供たちへお手紙を残されたんですが、「自分自身の死というものは、あなたがたにとって私からの最後のプレゼントになります」という言葉を残されました。

私たちは家族みんなが健康に生きていれば幸せだと思いがちですが、それが崩れた時、なんで私ばっかりつらい目をみなきゃいけないんだと思ってしまいます。それが人間なんです。そこでそうではなくて、一般的に言えば不幸なことも全てしっかりありのまま受け止めて生きていくことができればそれこそ幸せであって、浄土真宗の救い・ご利益と言えるんじゃないでしょうか。

新年ということもあるので、一般的には、今年一年も健康でご多幸で、なんてことをあいさつしたりしますが、そうではなくて、いのちをいただいて生きるということはどういうことかということをあらためて考える一年としていただければありがたいなと思いながらご挨拶とさせていただきます。

◎報恩講

平成二十四年十月二十八日に報恩講をお勤めいたしました。

報恩講は真宗門徒にとって一番大切な行事で、親鸞聖人のご命日を目安に等覚寺では毎年十月後半にお勤めいたします。浄土の教えを私たちに教えてくださった親鸞聖人への御恩を胸にみなさんと共にお勤めし、その自らの依りどころである教えに再び出遇いました。

◎帰敬式

平成二十四年九月二十二日に帰敬式を行いました。帰敬式は仏・法・僧の三宝(さんぽう)に帰依し、門徒となって教えを聞いていくことを誓う、生涯にただ一度の大切な儀式です。帰敬式を受式しますと「法名(ほうみょう)」をいただきますが、それは「私は、仏弟子として生きていきます」という自身の名告(なの)りであり、決して死後の名前をいただくということではありません。

この日は十五人の方が受式され、共にお念仏の道を歩む仏弟子として新たな人生をスタートされました。

お焼香について

浄土真宗に限らず、焼香とは文字通り香を炊くことを意味します。焼香は仏教のほとんどの宗派で行われています。お供え物やお花のように、仏様に香をお供えするという意味合いです。お香には一般に言うお線香と粉状の抹香と２種類がありますが、浄土真宗では使い分けについての決まりはありません。抹香は火種が必要なことや、比較的高価なため、日常に使う人は少ないようです。それに対し、線香は扱いやすく金額的に求めやすいものが多いため、日々のお参りに用いられることが多いようです。

浄土真宗では、香を供えることを供香といい、供香には法要、勤行に先立ってあらかじめ仏前に香を薫じておく燃香と、法要や儀式に際して特に仏前に進み出て火中に香を薫じる焼香との２種類があります。

焼香は、仏教の儀式には欠くことのできないものであり、「お釈迦さまのご在世の当時から行われていた」と言われています。

浄土真宗において最も大切なお経の一つ「仏説無量寿経」には、「一切万物がみな、無量の雑宝や百千種の香をもって共に合成し、その香りは普く十方世界に薫ぜん」と、薫香、すなわち、香りをもってお浄土のはたらきを教えられています。つまり香を焚く、すなわち、焼香をするということは、その薫香により、仏前を荘厳（おかざり）すると共に、浄らかな光明の世界（お浄土）を思い浮かべるご縁となります。念珠でのお参りだけではなく、尊いご縁なのですから、ぜひ、ご参列のみなさまにも焼香していただきましょう。

焼香は、「沈香をつまみ、香炉の中に入れ、薫じる」という点においては、どの宗派も同じなのですが、焼香の作法について

は、宗派によって多少の差がみられます。私たち真宗大谷派の作法では、まず阿弥陀如来を仰ぎ見て、２回焼香します。この時**お香をいただくことはしません**。そして最後に合掌礼拝します。基本的には通夜葬儀の際も真宗門徒としてこの作法でやるといいでしょう。

ちなみに日々のお参りで使うお線香の場合は、香炉に**立てることはせず**に火が付いている方を左側にして寝かせてお供えします。ご家庭のお仏壇の場合は香炉にそのままでは入りませんので、合う大きさに折ってから火を着けて同様に寝かせます。火は息で吹き消さずに手であおぎ消すか、すっと引いて消すようにしましょう。また、この時のお線香の本数に決まりはありません。

いかがでしょうか。意外と一般常識とされている作法って実はあいまいだと思いませんか？これを機会にいろいろと昔からの習慣等の由来を調べてみると面白いかもしれませんね。みなさんの参考になれば幸いです。

お参りについて

いつもお墓参りにいらっしゃる際に、インターホンで呼び出すのにご協力いただいておりまして、誠にありがとうございます。その玄関扉についてですが、防犯の都合上警察の指示がありまして、これからは施錠させていただくことになりました。ご不便をおかけいたしますが、何とぞご了解のほど、よろしくお願いいたします。

ご披露

等友へのご懇志

鳴海様 廣田様 浅井様 山口様 福原様
高橋様 新井様　（順不同）

いつもご支援いただきまして、誠にありがとうございます。また、他にも多数の方から等友へのご支援をいただいております。（申し訳ございませんが、お名前には漏れがあるかと存じます。おっしゃっていただければ次号以降に順次ご紹介させていただきたいと思います）

編集後記

こんにちは、釋 翔雲（弟・翔）です。みなさん本年もどうぞよろしくお願いいたします。

今年はへび年ということですが、へびはよく縁起がいいとかって言われてますよね。へびの抜け殻を財布に入れておくとお金が貯まるだとか、新年にへびの夢を見ると縁起がいいだとか。年明けには京都でへびの形をしたヤマイモが発見されたとかで縁起がいいとニュースにまでなっていました。

この縁起の由来は中国から来たようで、ヘビの体は長く、脱皮しながら成長し、長生きする生き物なので、もともと中国では神秘的な生き物だったらしく、その成長する様子に繁栄やお金が増えていくイメージがつけられたようです。

私たち人間はどうしても良いほうへ良いほうへと願ってしまうので、このような迷信もいろいろ

と生まれてくるんですね。迷信を否定するわけではないですが、いちいち信じ込んで気にしていたらちょっと疲れちゃいますよね。。

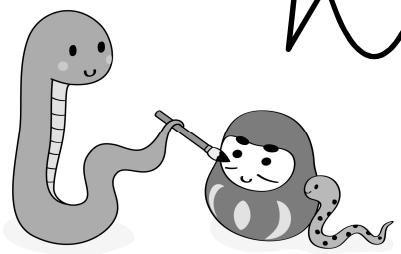
浄土真宗門徒はそんな迷信やおまじないなどにはとらわれません。昔から「**※門徒もの知らず**」と言われているぐらいです。なぜかというと、私たちは生きていれば良いことも悪いことも起こる、それは必然のことであり、それが私たちが生きているということ。いのちが終われば必ず阿弥陀さんがお浄土へと救いとってくださるので、死後のことは安心して、生きている今はすべてのことをしっかりと受け止められるわけです。

少し難しくなってしまいましたが簡単に言うと、死後は必ず救われるんだから今は自分自身のいのちを一歩ずつしっかりと歩んでいこうということです。

・・と説明したものの、僕自身もついついテレビの占いを見ては一喜一憂してしまっています（笑）

門徒もの知らずって？？

もの知らずって言われるとまるで真宗門徒は無知な人ばかりなの？って思っちゃいますよね。そうではなくて「物忌（ものい）み知らず」の事を言うんです。物忌みって大安・友引・仏滅といった日柄の善し悪しや方角・家相といった根拠のない世間の常識を言います。門徒は昔からその常識に従わずいつも通りに過ごしていたことから、他の人々がこの言葉を言うようになりました。私たちはこの言葉を、迷信や俗習にまどわされたり不安になる必要のない真宗の安心のあり方を示すものとして受け止めています。



平成二十五年行事予定

二月二十三日（土）　いのちのふれあい
ゼミナール
（於　正行寺）

三月二十日（水）　永代経ならびに
彼岸法要

三月十七日～
二十三日　春季お彼岸

七月十三日～
十六日　お盆

七月十五日（月）　盂蘭盆会法要

九月二十日～
二十六日　秋のお彼岸

十月二十七（日）　報恩講

◎みなさまお誘い合わせの上、
お気軽にご参加ください。

平成二十五年 年回表

一周忌	平成二十四年
三回忌	平成二十三年
七回忌	平成十九年
十三回忌	平成十三年
十七回忌	平成九年
二十三回忌	平成三年
二十七回忌	昭和六十二年
三十三回忌	昭和五十六年
三十七回忌	昭和五十二年
四十三回忌	昭和四十六年
四十七回忌	昭和四十二年
五十回忌	昭和三十九年
七十回忌	昭和十九年
百回忌	大正三年